学生時代のネットワークを生かしたNPO法人「ソレイユ」

～遊びたい。働きたい。外に出かけたい。障がいのある人の地域生活を強力サポート～

「ソレイユ」のメンバー
（全員が広島国際大医療福祉学科卒）

（写真左から）

大堀 聖子（おおほり・せいこ）さん
2005年3月卒。在宅介護サービス提供事業「ヘルパーステーション ソレイユ」を管理統括する。社会福祉士、介護福祉士、ガイドヘルパー。28歳。

竹内 麻美（たけうち・まみ）さん
2004年3月卒。2009年3月広島国際大大学院総合人間科学研究科修士課程修了。ソレイユの相談業務・保険請求・事務関連職務に従事。社会福祉士。28歳。

平田 孝嗣（ひらた・たかし）さん
2004年3月卒。NPO法人ソレイユを同じゼミで学んだ竹内さん、後輩の大堀さんと共に設立。ソレイユの管理・統括責任者を務める。介護福祉士、障害者スポーツ指導員（中級・スポーツコーチ）。29歳。

太田 博之（おおた・ひろゆき）さん
2006年3月卒。福祉用具専門相談員、ガイドヘルパー、訪問介護員2級、福祉住環境コーディネーター 2級。27歳。

社会の幸福と福祉に貢献する人材の育成を目指し、1998年に開学した広島国際大学。そこで学んだ専門知識や技術、在学時代に築いたネットワークを生かし、障がい者福祉サービスなどを提供するNPO法人「ソレイユ」を立ち上げ、福祉関連事業を展開する卒業生たちがいます。温かいコミュニケーションを重視し、地域密着型サービスの提供に取り組んでいる4人に、NPO法人設立のきっかけ、現在の仕事の内容、今後の抱負などについて伺いました。

■きっかけは「自分たちでやってみたら」

NPO法人ソレイユは2006年に広島県の認可を受けてスタートしました。設立以前、同じゼミで学んでいた平田さんと竹内さんは、卒業後、東広島市黒瀬町にあった民間の介護ステーションで勤務していました。ところがその事務所は町からの撤退を決定。撤退計画を知るや否や、「黒瀬町で活動を続けたい!」と思った2人は、ゼミの指導教員であった恩師・坊岡正之教授のもとへ相談に向かいます。

「坊岡先生は『それなら自分たちでやってみたら』とおっしゃいました」（竹内さん）。「自分たちを必要としてくれている人がいるなら、とにかくやってみよう。そんな熱意だけで始めたというのが正直なところです」（平田さん）。介護サービスを提供するには法人格が必要だということで、NPO法人の設立を決意。設立に向けて準備を進める

中で、学生時代からヘルパー経験があり、大きな信頼を寄せていた1年後輩の大堀さんに声を掛けたところ、協力を快諾してくれました。坊岡教授のサポートを得ながら3人は奔走し、ついにNPO法人ソレイユの誕生にこぎ着けました。

■3つの事業を柱に～利用者が目指す暮らしへのサポート～

ソレイユは現在3つの大きな事業を運営しています。1つ目は、障害者自立支援法に基づく訪問介護や移動支援などの「ホームヘルプ事業」、2つ目は福祉用具の販売・レンタル、修理などを行う「福祉用具関連事業」、そしてもう1つの事業は、特別支援学校に学生ボランティアを派遣し、生徒と学生の交流を図る「ボランティアコーディネート事業」です。

ホームヘルプ事業では、入浴や食事、余暇の移動支援のため、主

interview-03

NPO法人「ソレイユ」理事長 **平田 孝嗣**さん　事務局長 **竹内 麻美**さん　ヘルパーサービス提供責任者 **大堀 聖子**さん　福祉用具専門相談員 **太田 博之**さん

学生サポーターと特別支援学校の生徒たちで宮島へ

に広島国際大医療福祉学科の学生で訪問介護員2級（ヘルパー）の有資格者を派遣しています。派遣の基本方針は「同性・同年代による支援」。いわゆる生活支援に限定せず「同世代の人と話をする、遊ぶ」などの機会を提供したいという思いを実現しました。「週末に学生ヘルパーとショッピングセンターに遊びに行くだけのことでも『今まではお父さんと近くのスーパーにしか行ったことがなかった。本当に楽しかった』という声が寄せられます」（大堀さん）

福祉用具関連事業は、訪問先のお宅で「用具の修理を依頼してもすぐに来てくれない」という話を聞き、「それならうちがやろう」（平田さん）と昨年度からスタート。車いす販売・修理の企業で勤務経験のある太田さんもスタッフに加わって、事業を強力にバックアップしました。現在は、聴覚障がいのある方や失語症の方向けのコミュニケーション機器の販売・修理なども行っています。

ボランティアコーディネート事業では、東広島市から委託を受け、医療福祉学科や心理科学部の学生ボランティアを広島県立黒瀬特別支援学校に週1回派遣しています。「学生ボランティアにしか見せない生徒たちの表情が見られるので、学生らしさを大切にしてあげたいと思っています。生徒たちが元気になるのはもちろん、初めは戸惑っていた学生が少しずつ成長していく姿を見るのもうれしいですね」（平田さん）。ソレイユはさらに現在、4つ目の大きな柱として、身体に障がいがある人のためのケアホーム設立に向けて計画を練っています。

■「一緒に生きていく」ことを学んだ学生時代

大学在学中に身をもって福祉の現場を知ったことが、ソレイユの4人にとっては大きな財産になっています。障がいのある人に対して、その障がいばかりを意識するという考えではなく、みんなで一緒に生きていくという大学で学んだ姿勢も、メンバーに大きな影響を与えています。

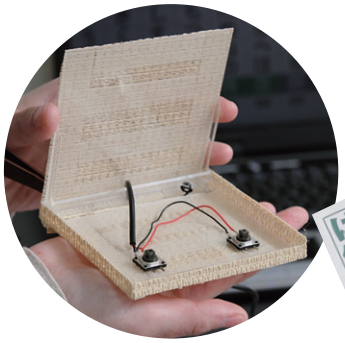
自身が車いすユーザーである竹内さんは、入学前に広島国際大を訪れた時、車いすのまま利用できるトイレに女性用・男性用の区別があることに気付きました。「障がい者用」として一括りにしていないことが分かった瞬間、「ここは良い学校だな」と直感したそうです。

在学中に介護施設でアルバイトをしていた大堀さんは、あまりにも効率重視な施設のやり方に戸惑い、そのことに対する不満や意見を坊岡教授に話していたと言います。「私は自由にものを考え、行動するのが好き。障がいのある人も同じだと思い、一人ひとりの気持ちを尊重すべきだと先生に訴えたことを覚えています」（大堀さん）

メンバーが向き合うのは「たくさんの可能性を持つ1人の人」であり「障がいのある人」ではありません。「そういう視点で活動するソレイユの存在が、地域のお役に立てればうれしい」と4人は口をそろえます。また、お互いの良さや違いを認め合える仲間であり、同じ志を持つ同僚の竹内さんの車いすを特別に意識することもありません。それがソレイユなのです。

■きめ細やかな利用者目線のサービスの提供を

ソレイユを立ち上げたころは、経済的にも大変な苦労がありました。それでも「このメンバーでやり抜けたことは意義が大きい」（竹内さん）。介護福祉事業へのニーズはさまざまですが、現状として大規模な施設ではどうしても効率重視で作業を進めざるを得ません。「大きな施設ではできない、きめの細かいサービスを徹底できる可能性が高いのは、地域に根差したフットワークの軽快な小集団でしょう。私たちだからこそできることをしていきたい」という平田さんの力強い言葉はまさに、「栴檀（せんだん）は双葉より芳（かんば）し」という故事を思い起こさせます。広島国際大学が開学以来展開している医療・福祉に関する取り組みが社会で芽吹いた活動でもあり、大学が地域社会に対して担うべき役割を再確認することができました。



太田さんが製作した
コミュニケーション機器操作用のスイッチ。
市販のものより使いやすいと好評

障がい者の就労支援を行っている
全国各地の団体・個人の活動を
紹介する書籍も編集